

多文化混交地域のマイノリティ

——接触領域の食からみるエスニシティ——

安井 大輔

はじめに

国際的なヒトの移動現象が加速する中で、移民や異なる文化をもつ彼らのエスニシティを対象とした研究がさかんになつてきている (Castles & Miller 2009)。日本でも在日韓国・朝鮮人や沖縄人といったオールドカマー、日系ブラジル人などのニューカマーを対象とした数多くの研究がある。これら日本の社会学における移民研究・エスニシティ研究は、単一のエスニック集団に注目し、マジヨリティ対マイノリティの図式に基づき政治的・経済的なレベルから、差別や抑圧を生み出す日本の社会構造を問うものが多い。

しかしよりミクロな地域的・社会的な観点からみると、こうしたマクロな二項対立の構図では見落されてしまうような

人々の関係も存在する。もともとエスニック・マイノリティである移民は隣接して居住していることも多く、また現在の移民地域も新旧移民の混住が基本となっており、他のエスニック集団との共住・混在は今や共通の前提となっているのである。管見の限り多国籍化、混住化の進む地域社会には、マジヨリティとマイノリティという垂直的な関係だけでなく、さまざまな属性をもつマイノリティたちが相互接触し独自の秩序を形成している現実がある。多文化化の進む日本の移民のエスニシティを描き出すには、従来の研究のような特定のエスニック集団に限定された視点を、マルチエスニックな状況をとらえうる視座に転換する必要があるといえよう。

本稿では、従来の移民研究で支配的だったマジヨリティ対マイノリティというマクロな構図に収まらない社会関係を照らし出す。そのために多文化が混交した社会空間を、「地理

的にも歴史的にも分離していた人々が接触し継続的な関係を確立する空間」(Pratt 1992: 4)である「接触領域」としてとらえ、異なる文化や国籍に基づいた異なる力を背景にくり広げられる多様な人々の接触の様相を描き出すことを目的とする。特に横浜市鶴見区の移民集住地でのフィールドワークに基づき、「食」という日常生活に密着した実践を分析し、複数のマイノリティたちによってどのような関係が形成されているのかを描き出すを試みる。

1 先行研究の検討と視点

1.1 移民・エスニシティ研究における接触領域概念の有効性

本稿で対象とするような複数のエスニック集団が隣接居住し多文化が混交する空間を、文化人類学では上述のように接触領域(コンタクト・ゾーン)と呼ぶ。この言葉はマルチエスニツクな「ゾーン」という具体的な空間を表すとともに、「コンタクト」という双方向的な語にあらわされるように、地域にある様々なアクターの相互作用の、即興的な次元を際立たせる枠組みでもある(Pratt 1992)。この認識枠組みはポストコロニアルな人類学のフィールドが、それ以前の文化人類学にみられたような植民者(研究者)と被植民者(調査対象者)との間の、権力が一方的に発動されるライン(線)上の空間ではなく、むしろ双方向的な作用が働くゾーン(領域)で

あることを見出す。そしてこの相対的に自立し独自の秩序を形成したゾーンで生じる作用を記述することを重視し、アイデンティティの強化、融合、弱化、変成、ねじれなどの複雑な力の交錯を日常生活というミクロな現場から描き出そうとする(田中二〇〇七)。それでは社会学においてこの接触領域の概念を用いる意義はどこにあるのだろうか。

これまで日本の社会学でも異なる文化をもつ者との接触が論じられてこなかったわけではない。戦前から朝鮮や沖縄からの移住者は日本各地に定住しており、彼らオールドカマーが地域ごとに形成したコミュニティについて研究が蓄積されてきた(石原一九八二・谷一九九九など)。また近年では、ブラジルやペルーなど南米諸国からのニューカマー移民と地域住民との軋轢が頻発するようになった。一九九九年には愛知県県の団地でブラジル人移民と日本人住民の衝突から機動隊が出動する事態がおこるまでになっている。こうしたニューカマー移民との文化的・社会的なコンフリクトを背景に、労働市場や行政システム(梶田ほか二〇〇五)、義務教育(志水・清水編二〇〇一・宮島・太田編二〇〇五)など地域社会の現場から移民をめぐる問題に焦点が当てられてきた。

新旧の移民をめぐる研究は、二重国籍者の排除や日本語に限定された公教育にみられるような移民の周縁化された状況を告発してきた。これらの政治的教育的な権利についての研究は、移民の国籍・出身地域や彼らを取り巻く状況によって

違いはあるものの、マジョリティである日本人とマイノリティの移民という垂直的な関係を共通の前提としている。そこでは、沖縄人と日本人、在日韓国・朝鮮人と日本人、ブラジル人と日本人のように二項対立した関係が設定され、マイノリティは上位のマジョリティに対する下位集団としてのみ位置づけられている。

しかしマクロなレベルを離れ、ミクロなレベルから実際の移民の日常生活に焦点を当てると、マイノリティたちによる横断的關係も存在する。移民の数が増加し多様化するなか、異なるエスニシティをもつ移民が混ざり合って暮らす多文化混在の傾向はますます高まり、マルチエスニックな状況に注目する研究もあらわれ始めている（高智二〇〇八・八尾二〇一〇）。こうした現状を踏まえると、いま移民をめぐる研究において、従来どおりマジョリティ対マイノリティの構図をあてはめるのは、平板で単純にすぎないか。こうした状況をとらえるためにこそマジョリティとマイノリティの垂直的な関係だけでなく、むしろそのような力が作用する中でマイノリティ同士の「水平的」な関係を対象とする接触領域の概念を用いる意義がある。

人口の国際移動が加速する現代では、かつての二者接触の構図をはるかに超えて、異なる文化的背景をもつ多数の人々が一カ所で接触するという複雑な状況が各地にみられる。それぞれのグループは異なるヘゲモニー、権利、経済的地位な

どを背景に異なる力関係を背負って接触領域を生活している。ただ力をもっている集団とたない集団という二者接触の構図ではなく、異なるレベルの力をもつ多数の集団が状況に応じて「相対的」な強者・弱者の位置を占めているのが現代的な接触領域の特徴であるといえる。

接触領域では、従来の単純な二者間の構図ではなく、三者、四者が関わる複層的な構図が前提となる。このような観点に基づき複雑な接触の現場に注目することで現代社会の多文化化を理解することができるのだ。

1・2 食に注目する視点

日常生活に現れる文化接触を分析するために、本稿では食に注目する。日常文化は衣食住その他多くの項目を含むが、人間の生存により密接である点で、食の重要性はより高いものと考えられる。

食は人類の文化にとって普遍性と個別性とを同時にみることでできる対象となっている（石毛二〇〇五）。「食べる」という生活実践は、食欲という生理的欲求を満たす生物的行为として人類社会における普遍性をもつと同時に、何を食べ何を食べないかという食物規制の点からするとそれぞれの地域や文化によって無限にヴァリエーションが広がる個別性をもあわせもつ。それゆえ食は、一方で異文化のあいだでのコミュニケーションを成立させる共同性の源泉となり、他方で地域や宗

教などによって大きく異なる各エスニック集団の指標となる。

「食」は単なる栄養補給ではなく、社会的現象であり本質的に社会のあり方と絡み合っている。何を誰といつどのように食べるかは文化と階級に左右され、個人によっても変化する。そのあり方が、家族の状況や人間関係や社会集団の親疎にも響いてくる。特に移民のように異質とみなされる集団の場合、食べ物は文化間の差異を生み出す指標となり、集団のアイデンティティを強化する道具となる。どの国や地域にもその国・地域ならではの料理や食品があり、また伝統的に特別な料理がある。こうした料理を食べて育った人々は、故郷を離れて異郷で暮らすようになって、家庭の日常食や祭りなどの行事食を通じて、自分たちの食への愛着を維持し再現することを試みる(例: Devine et al. 1993)。一方で、移民と彼らを受け入れる社会は相互に影響を及ぼしあう。特定のエスニックフードを「汚い」「臭い」と嫌うような食べ物を媒介とした衝突や差別が生じる一方で、異なる料理が結びつき新しい料理や食事作法が誕生することもある(例: Miller 2006)。

このように移民と彼らの文化は食行為と深く結びついており、彼らの生活における食に注目する視点が有効となる。ただし本稿でいう「食」は栄養を摂取するという行為に限定しない。食べる場所、状態や食を同じくする人々との関係も食を含むものとする。

2 フィールドの概要

2・1 横浜市鶴見区臨海部の文化接触領域

以上の前提を踏まえ、筆者はエスニシティと食に焦点を当てたフィールドワークを行ってきた。具体的な調査地域は神奈川県横浜市鶴見区の臨海部である。ここは、明治末期から昭和初期にかけて、浅野總一郎や安田善次郎といった事業家によって埋め立てが進み、造船、製鉄、ガラス、製油などの大企業の工場が進出した。以来この臨海部は、隣接する神奈川県川崎市の臨海部とともに京浜工業地帯の中核として発展してきた歴史をもつ(鶴見区史編集委員会編 一九八二: 横浜市鶴見図書館 一九八七: 中嶋 一九九七)。京浜工業地帯の発展とともに、埋め立て事業や関東大震災の復興工事を皮切りに、臨海部の工場や工事現場で働くため多くの出稼ぎ移民が暮らすようになった。そして当時の劣悪な環境での仕事に従事した労働者の多くは、琉球諸島や朝鮮半島からの移民であった。一九一七年頃から、鶴見に隣接する川崎の富士紡績で働くため沖繩から五、六百名の女工がやってきて働くようになり、一九三五年頃から鶴見区にも多くの沖繩県出身者が暮らすようになった。同時に、一九三五年には朝鮮半島出身の労働者向けの夜間朝鮮語講習から始まった朝鮮学校が運営されるなど、川崎市から鶴見区にわたるエリアは朝鮮半島にルーツを

もつ人々の居住地域でもあった。そして現在も在日朝鮮人総連合会^①の支部が置かれるなど、鶴見は朝鮮・韓国出身者の結節点となっている。

さらに、一九四五年の沖縄での地上戦の後、土地を追われた人々や、戦地や植民地から復員したものの米軍占領下の沖縄に帰ることが不可能な県内出身者たちが、親戚や地縁を頼って鶴見区やその周辺地域に移り住むようになった。同時に大日本帝国の崩壊に伴い、横浜港から引き揚げてきた兵士や植民地居住者たちも鶴見に移り住み、沖縄出身者だけでなく朝鮮半島や中国など様々な国や地域の出身者が集まって暮らすようになった。

対象地域で沖縄そば屋を経営するH・Y氏(四十代男性)は、昔を知る人から聞いた話として、当時の様子を以下のように語る。

在日の韓国人、中国人の人、それと沖縄の人、その人たちが不法占拠してたらしいですよ、戦後。それで戦争が収まってこっちにやつぱり来たんで、もう人が、バラックですよ、よそ者が入ってくると袋叩きにあう、そのような環境だったらしい。無法地帯みたいなものだったらしい。

(二〇〇九年八月二一日聞き取り)

彼の語りからは、戦後すぐの時代の対象地域の猥雑で混沌

とした雰囲気伝わってくる。一九〇六年に沖縄県泡瀬^②に生まれた彼の祖母は一九三〇年代に本土に渡り兵庫県尼崎で働いた後、戦後の混乱の中バラックが立ち並ぶ鶴見に移住し地域で初めての沖縄そばの店をはじめたという。彼女の孫として鶴見に生まれ育ったH・Y氏が二代目として現在の店を経営している。

沖縄は、日本国内のみならず海外へも多くの移民を送り出してきた地域である。日本からブラジルへの移民が開始された一九〇八年から、沖縄県人の多くがブラジルに渡っている。さらに、米軍統治下の沖縄で土地を追われた人々の開拓地であるコロニア・オキナワ^③に多数移住するようになるなど、戦後も沖縄から南米各地への移住がさかんであった。そして一九九〇年の出入国管理及び難民認定法の改定前後から、ブラジル・ボリビア・ペルーなどから大量の出稼ぎ労働者が来日するようになり、日本各地で定住化が進んでいる。南米出身者のうち最も数の多い在日ブラジル人は二〇〇八年末時点には三二万人を超えた。同年のリーマンショック後の世界同時不況による景気後退にともない帰国があいつぎその数は減少傾向にあるものの、二〇一一年末の時点で二一万人を数え、中国、韓国・朝鮮につき在日外国人登録者数では第三位の地位を占めている(法務省入国管理局二〇一二)。そのうち神奈川県には約一万人が住んでいる(神奈川県民局くらし文化部国際課二〇一二)。また鶴見区には、他の区と比較してもブ

ラジルに加えペルー、ボリビア、アルゼンチンの出身者も多く、神奈川における南米出身者の中心地となっている（鶴見区二〇〇八・横浜市民局区政支援部窓口サービス課二〇一二）。これは先述したように南米への移民には沖縄出身者が多く、そのエスニック・ネットワークを介して沖縄出身南米人の二世、三世たちが多数移住するようになったためである（島田二〇〇〇・広田二〇〇三）。さらに二〇〇〇年前後から彼らのつながりで非日系の南米人も移り住むようになっていく。沖縄系の親族を頼りに移住してきた関係で、南米系の人々の暮らす地域は、沖縄県人会館など沖縄系コミュニティの結節点と重なりあっている。沖縄県人会やブラジル人NPOなどのエスニック組織は国や地域別に構成され社会集団としては別個のものとして活動しているが、個人や家族のレベルでは琉球諸島とブラジルを行き来し複数の所属意識をもつ人々もいる。たとえば、現在鶴見のブラジル人NPOに勤めるM・A氏（四十代女性）は自らをブラジルに渡った日系二世であるとともに日本に渡ったブラジル一世であると称する。彼女の両親は沖縄県恩納村の出身で、青年団による集団移住でサンパウロに渡り、彼女が生まれた。彼女は大学生だった一九九〇年に来日し、群馬県伊勢崎市の工場で働いたあと、同時期に来日していた兄が住む鶴見区に移り、日系ブラジル人の仲間と結婚した。以後、鶴見在住歴は二〇年以上におよぶ。

こうした日本と、植民地や移民送り出し先であった国・地域とのマクロな政治的・経済的な条件のもと、多様なルーツをもつ人々が集まり暮らすマルチエスニックな地域が鶴見区に形成された。対象地域は単に異なる文化をもつ人が居住していることで成立しているような平板な多文化状態にあるのではない。H・Y氏やM・A氏の来住経緯から分かるように、多文化接触地域の成立には、大日本帝国の植民地支配と移民政策の歴史が重なり合っている。鶴見で育ったH・Y氏もサンパウロで育ったM・A氏も、実際に沖縄に暮らしたことはないものの沖縄という共通のルーツをもつ。人々の関係には、こうした重層的な地域の歴史が反映されている。

2・2 調査手法・データ

本稿で用いるデータは、二〇〇八年から二〇一一年に行われたインタビューと参与観察を中心としたフィールドワークの記録に基づく。

二〇〇八年から二〇〇九年にかけては、レストラン・食堂・物産店のオーナーや従業員を対象とした調査を行った。ここでは沖縄や南米各地の料理を提供するレストランや食材を販売する物産店の関係者に対してインタビューを実施した。サンプルは、電話帳と鶴見区発行の地域紹介のガイドパンフレットから、沖縄系飲食店と南米系の飲食店を選出した（東日本電信電話株式会社二〇〇八・鶴見区編二〇〇九）。さらに、

これらに掲載されていない店舗についても、可能なかぎり店を訪ねインタビューを行った。また調査対象のレストランにて店の様子や訪れる客の様子を観察した。

二〇一〇年から二〇一一年にかけては一般家庭と地域のエスニック行事を対象とした調査を行った。家庭食の調査は地域に暮らす移民の経験と記憶をもつ沖縄、朝鮮、南米にルーツをもつ人々にインタビューを実施した。行事食の調査は地域行事にスタッフとして参加観察するとともに、沖縄県人会やエイサーサークル、ブラジル人NPOといった行事の運営者やイベント参加者たちにインタビューを実施した。

調査結果に基づき、以下まず3節で食が作られるエスニック料理店を対象に地域の文化接触の様態を記述し、続く4節ではこの文化接触を生きる人々の関係をエスニック境界の変化という視点から分析する。

3 食の場面からみる文化接触

異なるエスニシティの接触がいかなるものとなっているのか、事例から観察する。食に関わる表象としてエスニックレストランのメニュー、この表象を作り上げる店のオーナーと従業員、そして店側の提供する料理とそれを食べる客をとりあげることにより、表象・生産・消費の三点から地域の食を記述する。

表1 エスニックレストランのメニュー：形式と使用言語一覧
(2009年8月時点。安井 2010 より)

店名記号	提供料理	形式	表記の有無			注
			日本語	ポルトガル語	スペイン語	
Y	沖縄	壁掛けの木札	○	×	×	
B	ブラジル	冊子・黒板	○	○	×	
O	沖縄	冊子	○	×	×	
E	ボリビア/アルゼンチン/ ペルー/沖縄	冊子	○	○	○	日本語ページにローマ字が併記
K	沖縄	壁掛けの木札	○	×	×	
S	ブラジル	冊子	○	○	×	
F	ペルー	冊子	×	×	○	
L	ボリビア/アルゼンチン/ 沖縄 (酒類のみ)	冊子	○	×	○	ワインやビールとともに泡盛を提供
N	沖縄	冊子	○	×	×	
C	ブラジル	冊子	○	○	×	
A1/A2	ブラジル	冊子	○	○	×	A1、A2は同一オーナー経営

3・1 エスニックレストランのメニュー
まず食の中でも具体的な食の場や料理そのものにおいて、文化接触はどのように表象されているのだろうか。地域のレス

ストランメニューの形式についてまとめたいものが表1だが、特徴的な例としてボリビア、アルゼンチン、ペルー、ブラジルの料理と沖縄料理を提供するE料理店をみる。
この店で提供される料理を紹介するメニューには日本語のひらがなと並び、ス

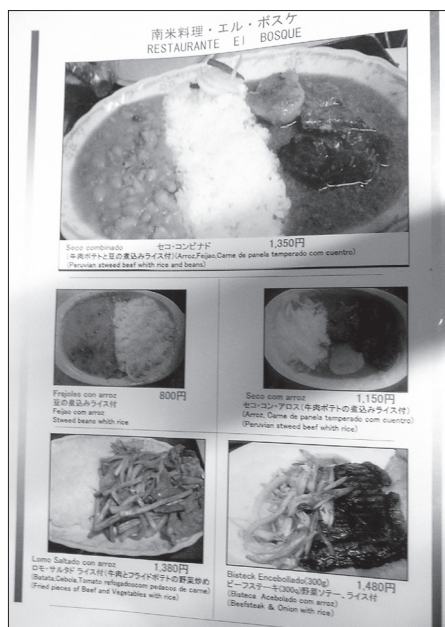


図1 E店メニュー

ペイン語・ポルトガル語を併記し各種の料理が紹介されている。一冊のメニュー内で沖縄料理と南米料理にページが分けられて記載されている。沖縄料理のページでは、料理の写真とともに、漢字カナ交じりの日本語で料理名が表記され、その下にさらにローマ字で読み仮名がふられている。南米料理のページ(図1参照)では、スペイン語の表記の下に日本語で表記がされ、カッコ書きで料理の説明がされているものもある。フェイジョア^⑤などブラジル料理にはポルトガル語の表記が付いている。このように多言語で表記することによって、日本語に不慣れな言語話者も店で食事することが可能

になっている。また、沖縄料理は日本語、南米料理はスペイン語・ポルトガル語を先に表記するなど、料理のジャンルによって表記される言語の順序を変えている。

3・2 エスニックレストランのオーナーと従業員

次に各店ごとのオーナーの経歴と従業員のエスニシティ構成をみる(表2参照)。

E店のオーナー(四十代女性)は沖縄で生まれ、小学校一年生の時に家族でボリビアに移住し、沖縄出身者の入植地である第一コロニア・オキナワで育ち、アルゼンチンで働き結婚した。そして一九九四年に来日し対象地域に住み、沖縄料理店で勤務したのち自分の店を開いた経験をもつ。また地域で最も老舗のブラジル料理店であるB店の元オーナー(六十代女性)は島根県出身であり高校卒業後東京で働いていたが、一九六八年に鶴見区在住だった沖縄出身の夫と結婚し、移り住むようになった。その後地域の病院で食事を作る仕事をを経て、無着色料・無添加物の惣菜屋を営業してきた。のちに地域に暮らすようになったブラジル人向けに弁当を作るようになったことから、ブラジル料理店に転業した。現在、彼女は娘に店の経営を譲り、自身は近所の幼稚園にて給食の調理を担当している。このようにレストランオーナーの出自はさまざまであり、B店オーナーのように自らのエスニシティとは別個にエスニックレストランを営むものもいる。

表2 レストランオーナーと従業員の経歴
(2009年8月時点。安井 2010 より)

	オーナー出身地	オーナー（家族）の移住	オーナー性別	オーナー年齢	従業員数（うち家族従業員数）	従業員出身内訳	備考
Y	神奈川県・鶴見	（祖母）沖縄県泡瀬→兵庫 （母）鹿児島市→鶴見	男	40代	4(1)	鶴見3人・ ベルー1人	
B	神奈川県・鶴見	（母）島根県→東京→鶴見 在住の沖縄人と結婚して鶴見	女	30代	3(0)	サンパウロ3人	
O	沖縄県・宮古島	宮古島→商社勤務で海外を 回る→那覇→鶴見	男	60代	6(4)	那覇4人・ 鶴見2人	他にアルバイ ト29人
E	沖縄県・那覇	那覇→ポリビア・サント クルス→アルゼンチン→サ ントクルス→鶴見	女	50代	3(1)	ポリビア1人・ コロンビア1人・ 東京1人	
K	沖縄県・数久田	数久田→鶴見	女	60代	2(1)	鶴見2人	
S	ブラジル・マナウス	マナウス→静岡県熱海市→ 鶴見	女	40代	2(1)	熱海1人・ 横浜1人	
F	ベルー・ワチャワチャー	鶴見	女	40代	0(0)		
L	ポリビア・サントクルス	サントクルス→神奈川県小 田原市→鶴見	男	40代	3(3)	サントクルス3 人	
N	沖縄県・中城	中城→鶴見	男	30代	2(2)	中城2人	
C	ブラジル・サンパウロ	サンパウロ→東京→鶴見	女	40代	3(3)	サンパウロ3人	
A1	ブラジル・バラナー	不明	女	50代	2(1)	バラナー1人・A1、A2は同一 サンパウロ1人オーナー経営	
A2	ブラジル・バラナー	不明	女	50代	3(0)	バラナー2人・A1、A2は同一 サンパウロ1人オーナー経営	

従業員の構成をみると、多くの店ではオーナーの両親やきょうだい、こどもが勤務している。しかし規模が大きくなるにつれ、家族以外の従業員も必要となってくる。その場合、異なる文化をもつ人々を雇用するケースもみられる。たとえば、沖縄料理店O店ではアルバイトとして男子高校生が働い

ているが、彼は中学生の時にブラジルから家族で移住した経験をもつ。

このように基本的に家族や親族など血縁関係に基づく従業員が働いている。だが経営規模が大きくなると、一時的な雇用関係が主であるものの異なるエスニック集団の成員が働いていることもある。そしてこの分類を店のエスニックな分布と重ねてみると、規模の大きい店には沖縄系の店が多く、結果として南米系の従業員も雇用されている。反対に南米系の店は相対的に規模が小さいために従業員は家族やオーナーと同じエスニック集団の成員に限られる傾向がある。

3・3 エスニック料理と客層

続いて実際に食されている料理はどうか。E店では沖縄と南米の食材を混ぜ合わせた独自の混交料理が提供されている。その一つ「ソバ・サルタド・コン・カルネ」は沖縄ソバを使った焼きそばだが、具として入れられているものは沖縄料理でよく用いられる豚肉ではなく、ポリビアやアルゼンチンでよく食される牛肉となっている。また「ソバ・サルタド・コン・マリスコ」は、同じく沖縄そばに海鮮食材を用いた焼きそばである。だがソースや塩で味付けられることが多い日本のもとは異なり、トウガラシなど香辛料が効いた味付けとなっている。オーナーによると、これらのソバ料理は店の売りとなるオリジナル品が必要であると考え、親から習った

沖縄料理と南米各地で覚えた料理を組み合わせ開発したものだという。

ただしこうした混交料理を注文するのは、主に観光目的で散発的に対象地域を訪れる地域外部からの客であり、地元の顔なじみの客からは、ゴーヤチャンプルーやアサド・エン・オヤなど正統的とされる沖縄料理、ボリビア料理の方が多く注文されている。混交料理が注文された場合でも、これらを楽しむ客たちに「これは何料理だと思いますか」と質問してみたところその答えは「新しい沖縄料理」か「少し変わったボリビア／ペルー料理」であった。混交料理は沖縄と南米の食が完全に混じり合った第三者的な融合料理ではなく、既存の文化カテゴリーが延長されたものと認識されている。

これらのレストラン、料理やその食べられ方は地域の文化接触の実態を示す存在となっている。確かに文化は混交しているが、単純に融合しているわけではない。レストランの雇用形態や、沖縄かボリビアというカテゴリーに収まる料理の消費にみられるように、集団を分断する境界自体は維持されている。このように接触領域の食には、統合と分離が絡み合う特徴がみられた。

4 接触にともなうエスニック境界の変化

多文化状態の中で混在するマイノリティ同士はいかなる関

係を築いているのか。エスニックな境界は強化されていくのか、それとも無化されていくのか。食の具象的な側面に続いて、次はそれを食する人々の関係から文化接触のなかでのエスニシティの変容をみる。

4・1 エスニック境界の強化

集団間の接触は平和な交流関係とは限らず、対立関係が生じることもある。たとえば、同地で生まれ育った在日朝鮮人二世のJ・P氏（五十代男性）は、地元の学校に通っていた一九七〇年代前半、映画「パッチギ」に描かれたようなケンカに明け暮れる高校生時代を送った。コンクリートブロックを使って殴りあう乱闘の末、全治二カ月の怪我を負ったこともあるが、そうしたケンカの相手はだいたい地元の沖縄人グループだったという。

そして南米出身者の流入により、対象地域の文化接触はまた異なる様相もみせる。たとえばE店では開店当初、多く来店するようになったペルー人客たちの騒ぐ声がうるさいと沖縄系オールドカマーの客からクレームがあった。E店オーナーによると、沖縄系の住民を中心とした以前からの客が、新しく店に来るようになった非日系のペルー人若者たちが大声で騒ぎながら飲食するのはマナー違反だと訴えたという。結局、彼女はコンフリクトやそれに伴う客足の減少を避けるため、沖縄料理店と南米料理店の二軒に分けて解決を図った。

衝突はときに暴力に転化される可能性を秘めている。地域を紹介するパンフレットなどではブラジル人、ペルー人、ボリビア人、アルゼンチン人は南米出身者として同一集団のように表象されている（鶴見区編二〇〇九）。南米系移民が一つとみなされているわけである。しかし、同じ南米でも国・地域ごとに異なる文化があり、その違いが考慮されず同一視されたために衝突が生じることもある。E店オーナーは自分の店で、スペイン語話者であるペルー人のホール係がポルトガル語話者である日系ブラジル人の客にスペイン語で話しかけ怒りを買った経験があるという。

ホール係ペルーの人、アルゼンチン出身のペルーの人だったんですね。その人が、そのブラジルの人にスペイン語で話しかけたらしいんです。何か態度が気に食わなかったんでしょうね、それで「ここは日本なのに、何でお前はスペイン語使えんだ」と食ってかかっているんです、その日系ブラジルの人。たぶんむかっていたのが、日系ブラジルって分かるのに、ポルトガル語しか知らないのに、スペイン語で話しかけられた。「ここは日本だから日本語話せ」って言われて、すごいけんか腰で。もう手出さんばかりの感じだった。

（二〇〇九年八月二日聞き取り）

文化接触には言語による違いが表面化し、身体的なコンフ

リクトにまで発展するような関係もある。これらの対立は、接触のなかで出身地域や文化的背景の違いが表面化しエスニックな境界が強化された例といえる。

ここで注意しなければならないのは、人々の関係は沖縄系、朝鮮系、南米系の人々のあいだで完結したものではないということである。彼らマイノリティ同士の関係には、マジオリティである日本人の存在が大きくのしかかっている。ただしマジオリティの力はマイノリティに均一に及ぶのではなく、マイノリティのなかで「相対的」な強者・弱者の位置が揺れ動く。接触領域の観点からは、日本社会から一方的に抑圧される移民という構図のみに回収されない、マイノリティ同士の複雑な構図がみえてくる。

E店のコンフリクトの例を分析することで、その構図を示そう。事例では、客であるブラジル人がペルー人ホール係のスペイン語が分からず、「日本語を話せ」と怒りクレームをつけた。しかしこのクレームをつけた客はブラジル人であり、母語はポルトガル語である。彼が理解できない言語で話されたことに対して怒りを感じたのだとしたら、「ポルトガル語で話せ」と主張した方が自然である。ではなぜ彼は「日本語で話せ」と主張したのか。彼は言語の理解度に基づきクレームをつけたのではなく、「日本では日本語を話すのが正しくそれ以外の言語を話すのは間違っている」という価値観に基づく主張をしたのである。ここに接触領域における複層的な

力関係がみてとれる。クレームをつけたブラジル人客もつけられたペルー人ホール係も、ともに移民として日本社会のマイノリティである。しかしブラジル人客は自身が日系であるがゆえに、相手のペルー人よりもマジヨリティ側に立っていると判断した可能性がある。そしてマジヨリティに近いことは、同じく周縁化されたマイノリティ同士の関係において、自身が優位な地位を占めることにもつながる。つまり彼の主張における「日本語」は、日本社会における自身の正統性を担保するものとして機能している。このようにE店での事例は文化ヘゲモニーをめぐるコンフリクトでもある。クレームをつけるブラジル人客は自らを正統的な日本社会の成員として位置づけようとする。ここではエスニシティの境界を相対的に決定している様をみてとることができよう。たとえばその場に日本人が直接にかかわっていないくとも、日本社会はサイレントマジヨリティとして常に参照せずには生きていけない対象となっている。

人々は状況に応じて複層化したエスニシティの一部を強化して優劣を示す場合もある。このように接触領域でのマイノリティの関係は均一ではなく、マジヨリティである日本社会の存在が意識されながら、複雑な関係を生成している。

4・2 エスニック境界の脱化と再定位

マナーや言語をめぐるコンフリクトを例に、文化接触のな

かでのエスニックな境界が強調される例を追ってきた。そうした関係の背後には植民地の宗主国であり過剰人口の送り出し国であったナショナルな存在としての日本の歴史があり、移民と日本社会の非対称な関係は現在の地域の人々にも大きく影響を与えている。だが文化接触を生きる人々の関係は、こうした外部から押し付けられたナショナルな規定に基づくものだけではない。そのような力が作用する場合も多いものの、必ずしもそれだけに還元できない関係もある。食が営まれる日常世界ではエスニック境界が強化されるだけではなく、エスニシティとは異なる次元で他者との関係を形成しようとする営為も観察される。ここからは、生活レベルの実態から共同性が構築される例を分析する。

4・2・1 エスニック境界の脱化

まずエスニック境界の脱化と呼ぶような関係があげられる。脱化とは従来の形式から抜け出して新しい形式になることを意味する。前述のH・Y氏の作るそばは、彼が料理人になるために修業した沖縄県で覚えた味よりも少し濃い味にしている。また彼の店はもともと簡単な沖縄そばの場合では注文後一分で提供され、客の滞在時間は平均して一五から二〇分ほど(H・Y氏からの聞き取りおよび筆者の観察結果)の短いものとなっている。こうした点からH・Y氏は自分の店をファストフード店であると称している。店の特徴は、地

域の特性とかかわっている。というのも店の沖縄そばは、地域に生きる沖縄人のエスニックフードであると同時に、地元の海岸に広がるコンビナートで働く工場労働者の食でもあるからだ。肉体労働に従事するブルーカラーはホワイトカラーに比べて大量のカロリーや塩分を必要とするため、自然と味の濃いものを好むようになる。また工場のラインでの仕事は集団作業であるために時間管理に厳しく昼食の時間に関しても自由度は低い。こうした客層の嗜好と要望に対応していった結果、店の沖縄そばは濃厚な味付けで注文後すぐ出されるファストフードになった。そして、沖縄系、朝鮮系、南米系の異なる背景をもつ労働者たちが同じ店で食事を楽しんでおり、食は従来のエスニックなつながりに加え新しく社会階級に似た関係性をも生み出すものとなっている。

エスニックな境界を越えて社会階級を反映した食として楽しまれている食の例は、H・Y氏の沖縄そばだけに限らない。たとえば、同地域でブラジル料理を提供するS店がある。この店のオーナー（三十代女性）は石川県出身でブラジルに移住した祖父をもつ日系ブラジル人女性であり、出稼ぎで来日し静岡県熱海市の旅館で働いていたときに出会った地元の日本人男性との結婚を経て、対象地域に移住した。彼女の語るところでは、S店の料理は出身地であるアマゾナス州マナウスの味を伝える正統的なブラジル料理であり、地元のジリで活躍するブラジル人サッカー選手が来店し、店には選手

からもらったというユニフォームが飾ってある。しかし常連客は同じ町内にある電気工事店を経営する沖縄出身の社長と従業員たちである。S店オーナー自身沖縄の地縁血縁を有しているわけではなく、店の料理や内装にも沖縄の風俗や雰囲気を感じさせる要素はないものの、彼女の店は沖縄系住民にママの店として親しまれ、客は仕事明けの疲れた身体をカイピリーニヤ^⑨で癒している。

沖縄そば、ブラジル料理が本来想定されていたエスニック境界の外部の成員にも嗜まれている。食が「沖縄」「ブラジル」という文化項目と切り離されることで、従来食によつて象徴されていた境界がエスニックなものとなる社会関係を示すものへと変化している。

4・2・2 エスニック境界の再定位

同じ食事を食べ合うことでつながるといふ食の普遍性に基づきエスニックな紐帯とは別の関係が形成される一方で、食が営まれる日常的な生活世界では自らのエスニシティを保持しつつ地域的な共同体意識を形成してもいる。

前述のH・Y氏が祖母から聞いていた当時の思い出では、店を開いた戦後すぐの当時、祖母は店の客である沖縄出身者たちと頼母子講^⑩をしていたと語る。

あの人（祖母）は日本の内地の人嫌いだなーっていう感じ

は、すぐくあつたね。おばあちゃんの周り沖縄の人ばかりじゃないですか、やつぱり。その中に入ってこれないですよ、内地の人っていうのはやつぱり。平気で入ってこれたのは在日の韓国の人たち。そういうおばあちゃんたち。あの人もやつぱり頼母子講やるわけですよ。それで仲良くなって。もうそういうところでつながっていくんですよ。それとお互いマイノリティーじゃないですか、共通するものもあるんじゃないですか、意識としてねー、やつぱり、言葉にしなくても、やつぱりなんか。

(二〇〇九年八月二六日聞き取り)

頼母子講は不払いになるリスクも高いため参加者は近い人間に限定される。それゆえ講への参加は彼女と朝鮮人たちのあいだに濃密な関係があったことを示している。オーナーの語りからは被抑圧のマイノリティという境遇を共通項とした関係が構築されていたことがわかる。

さらに現在、地元の沖縄系住民から構成される鶴見沖縄県人会は、毎年九月に地元の小学校グラウンドを使用して運動会を行っている。これは県人会主催の行事ではあるが、非会員を含む地域の住民全体にポスターやチラシを配布し広く参加を呼びかけている。各競技で参加者の所属を紹介する際に、かつては「宮古郷友会・某さん」と県人会を構成する郷友会ごとにアナウンスされていたが、現在は「潮田町・某さん」

と地元の各町名でもアナウンスされ、運動会の運営自体も県人会所属でない人々が参加しやすいようにされている。結果、同地域に暮らすブラジル人、ペルー人など南米出身者も参加している。

こうしたエスニック集団外部の人々を取り込もうとする工夫の背後に、県人会会員の高齢化や若い世代の県人会離れによる人手不足に対処する事情があるのも事実である。しかしながら、そもそもこうしたエスニック組織の成員に限定されたかたちでのみ人々の関係が続けられていたわけではない。メンバーシップの拡張は地域の現状を踏まえた上でなされていることにも注意すべきである。頼母子講の例でみてきたように、生活世界でエスニシティを越えたマイノリティ同士の関係が既にあったからこそ、運動会は不自然でない形で、「沖縄の祭り」から（「鶴見という」地域の祭り）へと転換されたのだ。

このような開放性は、実際に地域で生きている人々によって指摘されてもいる。先に紹介したJ・P氏も地域の特性を「鶴見はよそものにやさしい土地」と説明する。彼の回想した沖縄人グループとのケンカについても「今の若者のケンカはすぐナイフを出したりしてルールというものがない」という現在の若者世代に対する語りと合わせて語られたものであり、当時はブロックを使うような殴り合いでも限度がわかっているものだったと述懐している。ここから彼らのケンカに

も了解事項があつたということが推測できる。一定のルールのもとでの対立は、ケンカという形をとるものであつても、顔の見える関係があつてこそ可能なものであり、歴史的な過程から形成されたよそもの同士が暮らす地域的なつながりの存在を示してもいる。

対象地域の内部では、外部の日本社会とは異なる「よそもの」であることを共通項として、エスニックな境界が維持されつつ地域全体の共同意識が形成されている。多種多様な移民の混住から始まった対象地域特有の歴史から、マイノリティに対する開放性が形成され、オールドカマーの沖縄人と朝鮮人の間で相互扶助的な関係が作られ、現在のニューカマー南米人たちの受容につながっていったと考えられる。こうした関係が形成されるとき、エスニック境界は排他的な弁別指標としてではなく、同じ地域に生きるマイノリティとして自己を認識する枠組みとなり互いを結びつけるものとして新しく位置づけられ直されているのである。

おわりに

対象地域の沖縄系、朝鮮系、ブラジルをはじめとした南米系などのエスニック集団に属する人々は、外部の日本社会からのまなざしにさらされるなかで、状況に応じて文化ヘゲモニーをめぐる衝突するとともに共同的な関係を結んでもい

る。横浜市鶴見区の多文化混交地域は、エスニシティの異なる人々が集まり、マジオリティに同化していくのではなく、マイノリティであることを顕現させながら関係が形成される、相対的な自立性を備えた独自の領域となっていることが確認できた。

本稿では、このように多様な移民が出会い文化が接触するなかで生じるダイナミズムを、接触領域の食を通して描写・分析してきた。その結果、異なる文化が接触する中でエスニック境界が「強化」「脱化」「再定位」という変容の諸相をたどることが見出されたのである。

注① 在日朝鮮人の日本在留者団体。略称は朝鮮総連。一九四五年に結成され一九四九年にGHQの命令で解散させられた在日本朝鮮人連盟（朝連）と、その後一九五一年に結成された在日朝鮮統一民主戦線（民戦）を前身組織として、一九五五年に結成された。

② 現在の沖縄県沖縄市内にある地区。

③ 一九四五年以降に、ボリビア共和国に移住した沖縄県出身者が中心となって、一九五六年に同共和国サンタクルス県に建設した開拓移住地のこと。

④ この法律の改定によって、海外に住む日系人に特別なビザが与えられ、日系人が日本に合法的に入国し働くことが可能となった。

⑤ ブラジルの代表的な料理。フェイジョン豆を使った料理を意味する。豆と豚肉、牛肉を煮込んだ料理。ブラジル、ポルト

Devine, Carol M., Jeffery Sobal, Carole A. Bisogni and

Margaret Connors, 1999, "Food Choices in Three Ethnic

Groups: Interactions of Ideals, Identities, and Roles",

Journal of Nutrition Education, 31(2):86-93.

東日本電信電話株式会社、二〇〇八、『デイリータウンページ 横

浜市（神奈川県・港北区・鶴見区版）』東日本電信電話株式会

社。

広田康生、二〇〇三、『エスニシティと都市』有信堂高文社。

法務省入国管理局、二〇一二、『平成23年末現在における外国人登

録者統計について、【第1表】国籍（出身地）別外国人登録者

数の推移」(<http://www.moj.go.jp/content/00094842.pdf>

2012.5.21取得)。

稲月正、二〇〇八、『民族関係研究における生活構造的アプローチ

チの再検討』『日本都市社会学会年報』二六・七三―一八五。

石毛直道、二〇〇五、『食卓文明論——チャプ台はどこへ消えた？』

中央公論新社。

石原昌家、一九八二、『沖縄人出稼ぎ移住者の生活史とアイデンテ

ィティの確立』『沖縄国際大学文学部紀要』一〇（一）：六三

―六八。

梶田孝道・丹野清人・樋口直人、二〇〇五、『顔の見えない定住化

——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋

屋大学出版会。

神奈川県県民局くらし文化部国際課、二〇一二、『外国人登録者市

（区）町村別・主要国籍別人員調査表及び国籍別人員調査表』

県内外国人登録者統計：神奈川県 (<http://www.pref.>

ガル、アンゴラ、サントメ・プリンシペ、東ティモールなど
ポルトガルおよびその旧植民地で食われてこゝ。

⑥ポリビア料理の一種。牛肉とトマトなどの野菜を長時間煮込
んだもの。

⑦二〇〇四年製作、二〇〇五年一月二二日公開の日本映画。京

都における日本人の少年と在日朝鮮人の少女との間に芽生え

る恋を中心とした青春映画。日朝の高校生たちの乱闘シーン

が有名な青春群像劇でもある。

⑧このブラジル人客は会話や外見からホール係を非日系と判断

し自己の優越性を示そうとした。ただし日本語を解さない日

系の南米移民も多く、このペルー人も血統的には日系であつ

た可能性がある。マイノリティの自己認識にみられる権力関

係を分析する例として本事例を取り上げた。

⑨ブラジルの伝統的なカクテルの一種。ブラジル特選のスピリ

ットであるカシャーサをベースに、ライムジュースと砂糖を

砕いた氷と一緒にシェイクして作る。

⑩複数の個人や法人がグループを組織して一定額の金銭を払い

込み、定期的に一人ずつ順番に金銭の給付を受け取る金融の

一形態である。地域によって、無尽、頼母子などと呼び方や

方法が異なり、沖縄県や奄美諸島においては、模合や寄合（ユ

レー、ユレー）とも呼ばれる。日本においては、金融機関

から融資を受けられなかった社会的マイノリティのための相

互扶助システムとしての役割も果たしている。

文献

Castles, Stephen and Mark J. Miller, 2009, *The Age of Migration*,

kanagawa.jp/cnt/f4695/ 2012.5.21 取得)。

高智富美、二〇〇八、「マルチエスニック・コミュニティにおける民族関係とエスニシティ——大阪府八尾市を事例として」『日本都市社会学会年報』二六：一八七—二〇三。

Miller, Hanna, 2006, "Identity Takeout: How American Jews Made Chinese Food Their Ethnic Cuisine", *The Journal of Popular Culture*, 39(3):430-465.

宮島喬・太田晴雄編、二〇〇五、『外国人の子どもと日本の教育——不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会。

中嶋昭、一九九七、『鶴見といるふいる』230クラブ新聞社。

Pratt, Mary Louise, 1992, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, Routledge.

島田由香里、二〇〇〇、『横浜市鶴見区における日系人の就業構造とエスニック・ネットワークの展開』『経済地理学年報』四六(三)：四二—五六。

志水宏吉・清水睦美編、二〇〇一、『ニューカマーと教育——学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』明石書店。

田中雅一、二〇〇七、『コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む』田中雅一編『Contact Zone』一：三二—四三。

谷富夫、一九九九、『在日韓国・朝鮮人家族の「世代間生活史」——問題と方法』『人文研究』五一(九)：二二—四四。

鶴見区編、二〇〇八、『第2章 鶴見区における外国人区民の状況と多文化共生の課題について』『鶴見区多文化共生推進アクションプラン』四—一一。

——編、二〇〇九、『新つるみ de 多文化』鶴見区役所区制推

進課。

鶴見区史編集委員会編、一九八二、『鶴見区史』鶴見区史刊行委員会。

八尾祥平、二〇一〇、『沖縄における多民族関係の形成過程——琉球華僑総会龍獅團を事例に』『日本都市社会学会年報』二八：一五一—一六六。

安井大輔、二〇一〇、『コンタクト・ゾーンにおけるエスニックフード・ビジネス——横浜市鶴見区の沖縄・南米系飲食店・物産店から』『京都社会学年報』一八：四一—六六。

横浜市民局区政支援部窓口サービス課、二〇一二、『横浜市区別外国人登録人口(平成24年4月末現在)』(http://www.city.yokohama.lg.jp/ex/stat/jinko/non-jp/new-j.html 2012.5.21 取得)。

横浜市鶴見図書館、一九八七『鶴見の百年』横浜市鶴見図書館。

付記 本稿は科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。本稿の作成にあたり、インタビュに協力してくださった方々をはじめ関係者各位にお礼申し上げます。

(やすい だいすけ・京都大学大学院文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)

Minorities in Multiethnic Areas

— Ethnicity through the Lens of Food in the Contact Zone —

Daisuke YASUI

Graduate School of Letters,

Kyoto University

E-mail: hs0130yd@yahoo.co.jp

In the age of global migration, many multiethnic areas, where migrants from different cultures live together, have been produced all over the world. Such areas provide contact among various ethnic minorities, which are enabled by micro, local, but rich, relationships. However, previous ethnic and migration studies in Japan have generally focused on only binary ethnic relations, most notably Korean minority studies. This traditional view may have overlooked the multiethnic and multicultural realities of ethnic minorities in Japan.

This paper views such social spaces where multiple cultures mix as the “contact zone” (Pratt, 1992)*. I especially focus on the ethnicities and food in daily life, and describe cultural contacts and human relationships in them. This paper is mainly based on fieldwork conducted between 2008 and 2011 in Tsurumi Ward, Yokohama City, where Okinawan, Korean and Latin Americans coexist due to historical circumstances. In this multiethnic area, I conducted interviews in ethnic restaurants and participant observations of the ethnic groups.

This paper presents the complex and tangled relationship among plural ethnic minorities discovered as a result of this ethnographic research, which is totally different from the binary relationship between the majority and the minority. Ethnic minorities of this area clash on cultural hegemony and build community spirit under the pressure of the Japanese social gaze. I confirmed that the multiethnic area in Tsurumi Ward is a relatively independent zone, where minorities do not assimilate entirely into Japanese society, but make full use of their ethnic representations to construct social relationships. This paper describes the dynamism which arises from contacts between various immigrants and cultures, and by analyzing these contacts, I discover the three dimensions of ethnic boundary change: strengthening, defecting, and re-fixing.

* Pratt, Mary Louise, 1992, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, Routledge.